

平成 27 年 10 月 30 日	<b>病害虫発生予報</b> <b>11 月号</b>	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
----------------------	--------------------------------	------------------------

**農薬は、必ずラベルを確認し周辺状況を考慮して使用しましょう。**

**～ 適用作物名の誤認は農薬事故のもと！～**

＜ 目 次 ＞

<b>I. 今月の予報</b>	
<b>【注意すべき病害虫】</b>	
促成ピーマン：うどんこ病	1
促成ピーマン：アザミウマ類	1
<b>【その他の病害虫】</b>	
イチゴ，秋冬ハクサイ，レタス，秋冬ネギ	2
<b>【防除所レポート】</b>	
ナシ黒星病の秋季防除	3
本年のブドウ主要病害の発生状況	4
<b>II. 今月の気象予報</b>	<b>5</b>

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」([http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm))で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所    Tel : 029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/byobo/bojo/>  
フェロモントラップデータ随時更新中

## I. 今月の予報

### 【注意すべき病害虫】

#### 促成ピーマン

##### 1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在, 発病度<sup>\*</sup>(本年値 1.8, 平年値 0.5), 発生地点率(本年値 75%, 平年値 22%)ともに平年より高い。

※発病度: 病斑をもとに算出した数値, 最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため, 初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため, できるだけ取り除き, ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤は, 薬液が葉裏によくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また, 薬剤耐性菌の出現を防ぐため, FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を導入しているハウスで薬剤防除をする場合は, 天敵への影響に十分注意する。

##### 2. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在, 寄生花率(本年値 40.5%, 平年値 13.6%), 発生地点率(本年値 100%, 平年値 59%)ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く, 各種ウイルス病を媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤は, 薬液が花や果実にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また, 薬剤抵抗性の発達を抑えるため, IRAC コードもしくは系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を導入しているハウスで薬剤防除をする場合, 天敵への影響に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	萎黄病	発生量：－	10月下旬現在，平年より多い発生である。発病株はただちに抜き取り，適切に処分する。
	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ハダニ類		
秋冬ハクサイ	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
レタス	菌核病	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
秋冬ネギ	べと病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。

## ナシ黒星病の秋季防除

黒星病は、ナシの重要病害であり、近年発生が多い傾向にあります。翌年の発生を抑えるため、越冬する病原菌を対象とした秋季防除は効果的です。

## 1. 本年の黒星病秋型病斑の発生状況

10月中旬に行った秋型病斑（写真）の調査では、本年の発生量は平年よりやや少ない(表)。

表 ナシ黒星病秋型病斑の発病度と発生地点率

地域	発病度 <sup>1)</sup>			発生地点率 (%)		
	平成27年	平成26年 (多発年)	平年	平成27年	平成26年 (多発年)	平年
全県	0.5	2.0	1.2	57	89	70
県北・県央	1.6	2.2	1.5	80	67	54
県南	0.2	1.9	1.2	50	83	74
県西	0.2	2.0	0.9	50	100	74

1) 発病度 =  $\Sigma (2A + B) / (2 \times \text{調査葉数}) \times 100$

A: 病斑が葉面積の1/2以上を占める葉数。B: 病斑が葉面積の1/2未満の葉数。調査葉数は300枚。



写真 ナシ黒星病の秋型病斑（葉裏の薄い黒色の病斑）

## 2. 防除対策

## ① 薬剤防除

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10～11月の降雨時に枝を流れ落ちて鱗片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、落葉前の11月上旬までに防除を行う。特に、徒長枝の先端に薬液が十分にかかるよう、スピードスプレーヤの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分には、手散布等により補正散布を行う。

## ② 落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の3～5月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて土中深く埋めるかロータリ耕等によりすきこむ等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。

## 本年のブドウ主要病害の発生状況

本年のブドウ（露地栽培及び雨よけ栽培）における主な病害の発生状況をまとめました。病害の発生した圃場では、休眠期の防除対策を徹底してください。

### 1. 晩腐病

主に果実に発病する。被害果は表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ（写真）、果実に多数のしわが寄り乾燥固化する等、商品価値が低下する。例年 8 月頃から発生が見られ、収穫期にかけて増加する。本年 8 月下旬には、平年よりやや多い発生となった（発病果房率：本年値 2.3%，平年値 1.1%）。

[休眠期の防除対策]

果梗の切り残し、巻きひげ等は、病原菌の越冬場所となるので剪定時に取り除き、適切に処分する。また、発芽前の休眠期防除を徹底する。例年、晩腐病が多発する園では、雨よけ栽培の導入も検討する。

### 2. 褐斑病

葉に黒褐色の病斑を生じる。発病が激しいと早期に落葉する。例年 7 月頃から発生が見られ、9 月にかけて増加する。本年は 7 月に初発生を確認し、9 月上旬の降水量が多かったため、9 月下旬に急増し平年よりやや多い発生となった（図）。

[休眠期の防除対策]

落葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋める等適切に処分する。

### 3. ベと病

主に葉、花穂（果穂）に白色のかびを生じる。葉に発病すると黄変し発病が激しいと落葉する。また果穂に発病すると果実の肥大が停止し、商品価値が低下する。例年 6 月頃から発生が見られ、その後 9 月にかけて増加する。本年は 7 月に発生を確認し、9 月下旬は平年並～やや多い発生であった。

[休眠期の防除対策]

落葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋める等適切に処分する。



写真 ブドウ晩腐病による被害果

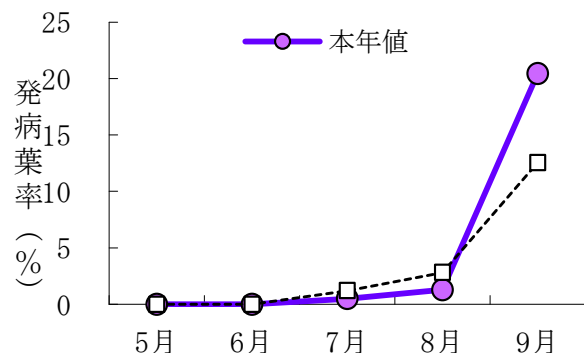


図 ブドウ褐斑病の発生推移

## II. 今月の気象予報

### 関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10月31日から11月30日)

気象庁 (10月29日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	10	30	60
降水量	関東甲信全域	20	30	50
日照時間	関東甲信全域	50	30	20

[概要]

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 10月31日(土曜日)から11月6日(金曜日)

気温 平年並または高い確率40%

<2週目の予報> 11月7日(土曜日)から11月13日(金曜日)

気温 高い確率70%

<3週目から4週目の予報> 11月14日(土曜日)から11月27日(金曜日)

気温 高い確率50%

### 農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類\* (FRACコード, IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成27年4月28日発表)の防除所レポート参照